

河田向山古墳群測量調査報告書 (1)

金沢学院大学文学部文学科
(歴史学専攻考古学ゼミ)
2023年2月

例 言

- 1 本書は、河田向山古墳群の調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、能美市泉台町・小松市下八里町・同河田町地内である。
- 3 調査は、2022年度大学コンソーシアム石川地域課題ゼミナール支援事業（題目：「加賀立国1200年」を契機とした地域の歴史PRと学びの場創出）の採択を受け、小松市・能美市の協力を得て、金沢学院大学文学部歴史学専攻（担当：考古学ゼミ 講師 戸根比呂子）が主体となって実施した。
- 4 2号墳の現地測量調査は2022年度に金沢学院大学が実施した。これに先立ち、2019年度に基準点測量、2021年度に1号墳の測量調査を、加賀立国1200年遺跡魅力発信委員会が業務委託し、それぞれ有限会社北市測量設計、株式会社太陽測地社が実施した。本書では、データ提供を受けて、1号墳の測量調査成果も報告する。
- 5 報告書の作成と刊行は2022年度に実施し、戸根が編集した。執筆分担は、文末に記載した。また、掲載した写真の一部は、加賀立国1200年遺跡魅力発信委員会の提供を受けた。
- 6 現地測量調査及び報告書刊行に際しては、次の方々にご協力、ご教示を受けた。記して謝意を表する。（順不同 敬称略）
（個人）
調査地地権者のみなさま
河田向山古墳群なぞとき調査隊のみなさま
（機関）
大学コンソーシアム石川
加賀立国1200年遺跡魅力発信委員会
小松市埋蔵文化財センター
能美ふるさとミュージアム
株式会社地域みらい
- 7 調査に関する記録は、金沢学院大学（2号墳関係）及び小松市埋蔵文化財センター（1号墳関係）で保管している。
- 8 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 本報告書中の位置図等の方位は真北である。
 - (2) 水平基準は海拔高である。
 - (3) 座標は世界測地系（測地成果2011年）である。

目 次

例 言 目 次

第1章 経緯と概要・・・・・・・・・・・・・・・・	3
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方針	
第3節 調査の経過	
第4節 既往の報告	
第2章 調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第1節 1号墳	
第2節 2号墳	
第3節 まとめ	
写真図版 報告書抄録	

第1章 経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

当該調査は、河田向山古墳群の地形測量調査である。

河田向山古墳群は、石川県小松市と能美市の市境にある。能美市泉台町の泉台公園ソフトボール場に隣接し、標高40mほどの小高い丘陵の頂上付近にある。近隣には南に2kmほどに位置する河田山古墳群、北に3kmほどに北陸最大級の大きさを誇る秋常山1号墳が存在する。(石原)

河田向山古墳群の調査は、2023年に加賀立国1200年の節目を迎えることが契機となった。加賀国府が存在したと推定される古代能美郡の連携として、小松市と能美市は地元の歴史団体等とともに、2019年に「加賀立国1200年遺跡魅力発信委員会」(以下、「魅力発信委員会」とする。)を発足した。さらにこの魅力発信委員会が主体となり、市民に遺跡への関心を高めてもらうため、両市にまたがる古墳群に着目して結成されたのが「河田向山古墳群なぞとき調査隊」(以下、「なぞとき調査隊」とする。)である。しかし1・2号墳の除草刈りと基準点測量を終えた矢先にコロナ禍に見舞われ、現地活動を長らく中断することとなった。中断期間中の2021年度には、1号墳の測量委託やドローン等の映像撮影により、情報発信が行われている。

2022年度を迎え、金沢学院大学文学部(考古学ゼミ)は小松市・能美市と協議の上、大学コンソーシアム石川の地域連携事業に申請、採択を受け、2号墳の測量調査等、事業再開を図ることとなった。(半間)

第2節 調査の方針

(1) 古墳の名称

河田向山古墳群は、第4節のとおり、『石川県遺跡地図』においては7基が存在することが知られていた。上記の2019年度活動の際には、ソフトボール場脇の登り口近くにある古墳(最北)から順に1号墳、2号墳として改めて所在を確認した。

なお、調査を進める中で、尾根上一帯を清掃、踏査することができ、少なくとも9基存在することが確認された。本書では、上記の1・2号墳に続き、北から順に3、4、・・・、9号墳としている。

(2) 地形測量調査の方法

3級基準点はGNSS測量(ネットワーク型RTK)により位置座標及び標高値を求めている。4級基準点は3級基準点を与点として、トータルステーションを用いた閉合トラバース測量により位置座標を求め、電子レベルを用いた直接ないし間接水準測量により標高値を求めている。以上は業務委託により、有限会社北市測量設計が2019年度に行った。

河田向山1号墳の地形測量調査(平面図・断面図作成)は、上記基準点を基に、トータルステーションを用いて放射観測により行った。以上は業務委託により、株式会社太陽測地社が2021年度に実施した。また、1号墳北側に広がるテラス面は、2022年度の2号墳測量調査に際して基準点を増設し、なぞとき調査隊が平板測量により補足調査を行っている。(戸根)

河田向山2号墳の測量調査は、2022年10月23日から同年11月6日に行った。測量は平板を使用し、上記の基準点や、新たに設置した杭を基準点とした。縮尺は100分の1、25cmコンタラインを基本として、紙面で作図した。

作業は、基準杭5-4による北西側(2班)、基準杭5-5による北東側(1班)、そして基準杭5-3によ

る南西側（3班）、と3分割し、3グループに分かれて行った。南東側は基準杭5-6により、測量の後半に1班が平板を移動して測量した。

以上の測量成果を元に、墳形及び墳丘規模を図上で推定復元した。2号墳の断面図は、平面測量図を元に作図した。さらに、2,500分の1都市計画図上に測量成果図を合成した。（向井）

第3節 調査の経過

2022年度の測量調査は、2022年10月23日、29日、30日、11月3日、5日、6日の6日間行った。今回は、基本的に杭4-3を基準にレベル測量と平板測量を行い、等高線は25cm間隔で測った。参加者は下記の通りである。

戸根比呂子、中村晋也（以上、文学部教員）、小谷友也、知田真幸（以上、大学院生）、石原梢、今井咲良、大森公太、絹川史香、小堀真依、坂下愛加梨、得田航生、半間結、松島亮太、向井新、輪湖幸太（以上、考古学実習Ⅱ受講生）、稲原健太、織田惟吹、小林光成、末上佳聖、首藤祥希、松田亜斗夢（以上、本学考古学研究会会員）、なぞとき調査隊（市民有志）（絹川）

10月23日（日） 天気：晴れのち雨 学生12名、教員2名、なぞとき調査隊8名

この日より河田向山古墳群の作業を開始し、機材を搬入した。訪れた当初は、2019年度になぞとき調査隊が伐採した木々や雑草などがまだ手付かずで残されている状況だった。まず、2号墳の周りを歩き、測量範囲の確認を行った。その後、地面に落ちている木材を除去し、細かい枝は箕を使用して集めた。細い木や地面から少し生えている木の伐採も行った。午後から、2019年度設置杭のレベル確認を進めたが、雲が厚く周りが薄暗くなり怪しい風が吹き始め雨が降り出したため、作業を中断し、道具をまとめて古墳を後にし、この日の作業は終了した。（松島）

10月29日（土） 天気：晴れ 学生11名、教員2名、なぞとき調査隊7名

新規の杭として5-1～5を設置した。5-1、5-2は現地にあったコンクリ杭を利用した。また4-3（標高44.396m）を基準としてレベル測量を行い、4-4、5-1～5の標高を計測した。午後からは3班に分かれ、それぞれ5-5、5-4、5-3を中心に平板を設置し、墳頂付近にあたる44.00m地点の計測を行った。（大森）

10月30日（日） 天気：晴れ 学生16名、教員2名、なぞとき調査隊6名

午前中は、国府校下公民館主催の加賀立国1200年ウォークラリー大会へ参加した。午後から、昨日に続き測量調査を行った。1班で43.75～43.00m、2班で43.75～43.25m・3班で43.75～43.00mまでの測量を完了させた。（小堀）

11月3日（木） 天気：晴れ 学生12名、教員2名、なぞとき調査隊7名

1班は42.75～41.75m、2班は43.00～42.00m、3班は43.00～41.25mの測量をした。午後には株式会社地域みらいによる地上型3次元レーザースキャナー、LiDAR SLAMの実演があった。（坂下）

11月5日（土） 天気：晴れ 学生10人、教員2名、なぞとき調査隊7名

1班41.50～41.00m、2班41.75m～41.00m、3班41.00～40.50mの測量をした。1班は午後から杭5-6へ平板を移動し、測量できていなかった範囲の作業を進めた（43.25～42.75m）。途中、野々市市末松廃寺跡発掘調査現地説明会に参加した。（小堀・輪湖）

11月6日（日） 天気：晴れ 学生13名、教員2名、なぞとき調査隊6名

前日の続きとして、1班は42.50～41.00m、2班は40.75～40.25m、3班は40.75～40.00mの測量を行った。また、2班は墳頂部最高位の標高の確認を行った。午後には各班担当エリアを完了した。順次、機材を撤収し、現地調査を終了した。（得田）

上記のほか、12月1日に、株式会社地域みらいによる、レーザースキャナー等の測量成果や活用案についての講習を受けた。2月11日には、小松市埋蔵文化財センター研修室において、2022年度調査参加者に向けた小報告会を実施した。また、11月下旬から2月にかけて、製図、報告書執筆を進めた。

第4節 既往の調査

河田向山古墳群は、これまで本格的な調査が行われていない。ここでは、古墳群のこれまでの報告や所見をまとめておく。

『石川県遺跡地図』（石川県教委1992）では、小松市・寺井町（現能美市）の項で河田向山古墳群の記載がある。表中「遺跡番号03310 向山古墳群」（小松市河田町）では、備考欄に「円墳7基、4～7号墳は寺井町地内、遺跡番号寺井11027」とある。また、「遺跡番号11027 向山古墳群」（寺井町佐野）の備考欄には「円墳7基。1～3号墳は小松市地内」とある。このことから、南側から順に古墳番号をふっていたことがわかる。一方、図中には、古墳群を示す枠と、円墳のおおよその位置が赤のドットで示されているが、そのドットは南側の小松市域に2基分、北側の寺井町域（現能美市域）に5基分となっている。現小松市・能美市の都市計画図にある市境とも若干のずれがあり、あくまでおおまかな位置を表現しているに過ぎないようである（第1図）。なお、参考文献の記載もなく、発見の経緯などは確認することができなかった。

かわりに、これまでに刊行された遺跡地図等をたどると、『石川県加賀能登石器時代古墳時代遺跡地名表』（石考研1951）、『県下の貝塚と古墳』（石考研1957）、『石川県遺跡地名表』（石考研1963）には記載がないが、『能美古墳群調査概要』（石考研1968）には記載があり、今回確認できた文献の中での初出となる。ここにおいて、能美古墳群の当面の定義として、「能美郡辰口町に所属する丘陵縁辺と独立丘通称西山、および寺井町の独立丘通称秋常山、末寺山、和田山、寺井山（三道山）を含む、東西約2.5km、南北約1.5kmの範囲に所在する62基以上の古墳を“能美古墳群”」（石考研1968：1）とし、次章においてはこれらの初出文献、発見や保存に至る経緯を記載している。一方、さらに南方に広がる古墳群については、「能美丘陵が南端で鍋谷川・梯川の開析作用を蒙って分断される小松市河田通称向山、同市埴田通称後山にも支群が所在し、能美古墳群の範囲が将来拡大される可能性をのこしている」（同上）としているが、河田向山古墳群の存在が説明されているに過ぎず、いつ、どのように発見されたかは記載がない。

今回、河田向山古墳群の発見の経緯は確認することができなかったが、上記を踏まえると、能美古墳群周辺での工事に際して、古墳群の分布調査を進める中で、1963～68年の間に発見されるに至った可能性も考えられる。今後、これらの経緯の確認も課題としておきたい。（戸根）



第1図 『石川県遺跡地図』の河田向山古墳群 No.03310
(石川県教委1992を一部改変、S = 1/40,000)

第2章 調査の成果

第1節 1号墳

1号墳は、径約22mの円墳である。標高42.00～44.75mの丘陵北端部に位置し、墳頂部の標高は44.88m、高さは約3.0mである。1号墳の南には2号墳が隣接し、北側には幅5mほどのテラス状の地形が帯状に広がることから、この南北の傾斜変換点付近を墳裾と推定し、ほぼ正円形に復原している。さらに北側の一段下がった標高40m付近にも、幅3mほどのテラス状の地形が見られる。なお、周溝は園路造成による削平されていることもあって判然としていない。(知田)

第2節 2号墳

2号墳は当初、1号墳と同規模の円墳と想定していたが、測量調査の結果、方墳である可能性が高いことがわかった。長辺は約24m、短辺は約18m、標高41.50～44.50mに位置し、墳頂部の標高は44.53m、高さ約3.0mであった。墳丘長軸はN-65°-Wであり、山の尾根に直交する。北西、北東側が急な傾斜になっており、一方で南西、南東側は緩やかな傾斜を描いている。(今井・得田)

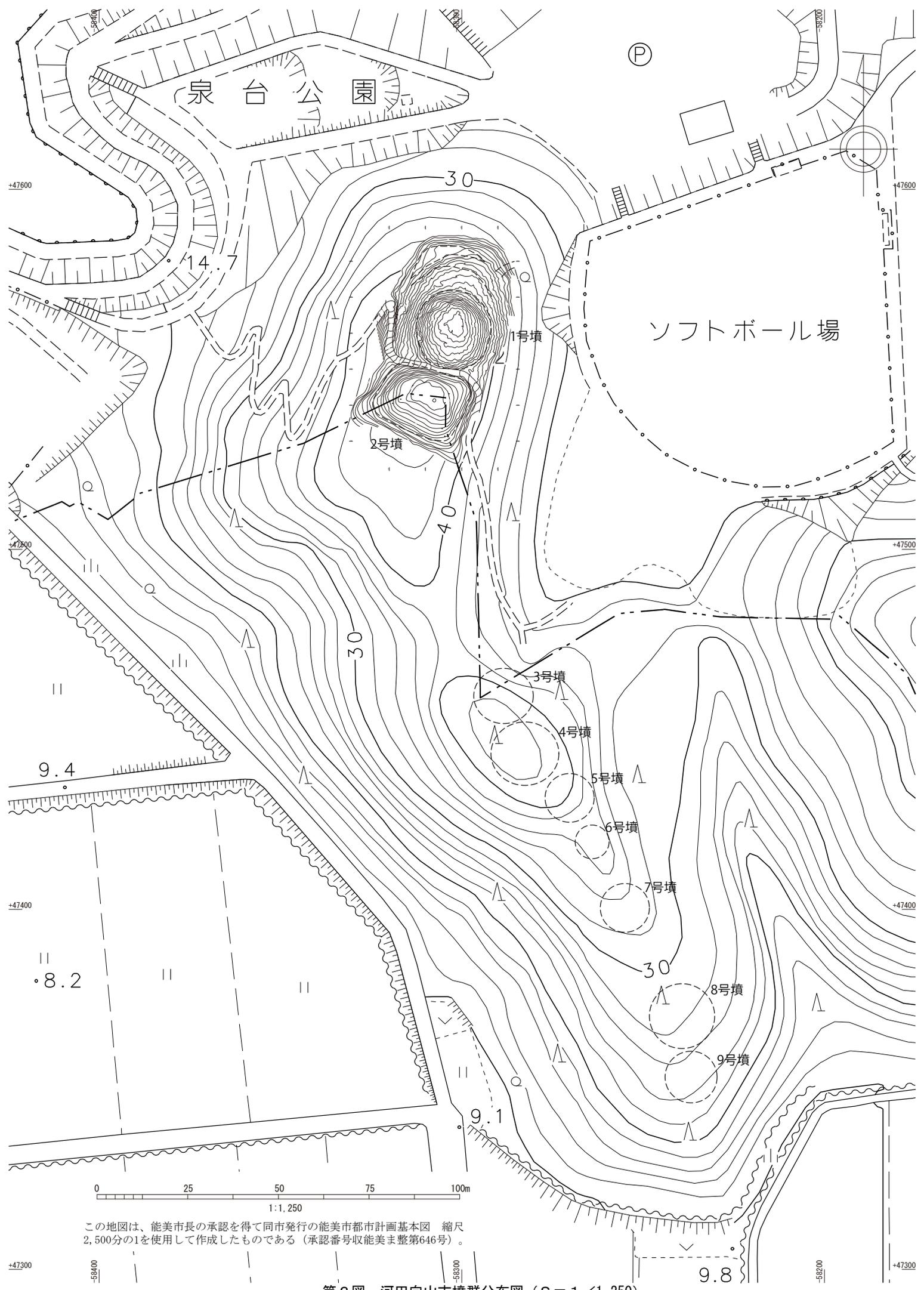
1号墳の南に位置し、北辺は1号墳と接しているが、後世の園路造成により切り合い関係は不明である。2号墳は東辺も若干、後世の削平を受けており、周溝や墳裾も判然としない。ここでは現地での地形観察や、地形測量の成果を元に、わずかに傾斜が変わるあたりを墳裾と推定した。

第3節 まとめ

今回の調査によって、河田向山古墳群の分布状況を確認するとともに、2基の古墳の測量調査を実施することができた。古墳群はこれまで7基と想定されていたが、少なくとも9基存在することを確認した。また、1・2号墳はいずれも直径20mほどの円墳と考えられていたが、1号墳は直径約22mの円墳、2号墳は長辺約24mの方墳である可能性が高いことを確認した。1・2号墳の周囲には園路造成の際の削平があり、両古墳の前後関係や周溝の状況は判然としない。ただし、古墳を大きく損壊するものではなく、両古墳とも良好に残存していることを確認した。

3～9号墳は、その存在とおおまかな場所を確認したが、いずれも10～20m程度の円墳であること、9号墳は前方後円墳の可能性もあることなどを確認したに過ぎない。今後、さらに古墳群が広がる可能性も視野に、さらなる踏査と地形測量を継続する必要がある。また、今回地形測量調査を行った古墳についても、特に2号墳は方墳の可能性が高いことを指摘したが、トレンチ調査等によって、より正確に形状や規模を確認できよう。さらに、古墳群の年代についても、現時点では出土品に恵まれず、周辺の古墳群の状況などから推定することも容易ではない。これについても、今後の重要な課題といえよう。

いずれにしても、今後の調査によって、河田向山古墳群の位置づけが明確になることを期待したい。(戸根)

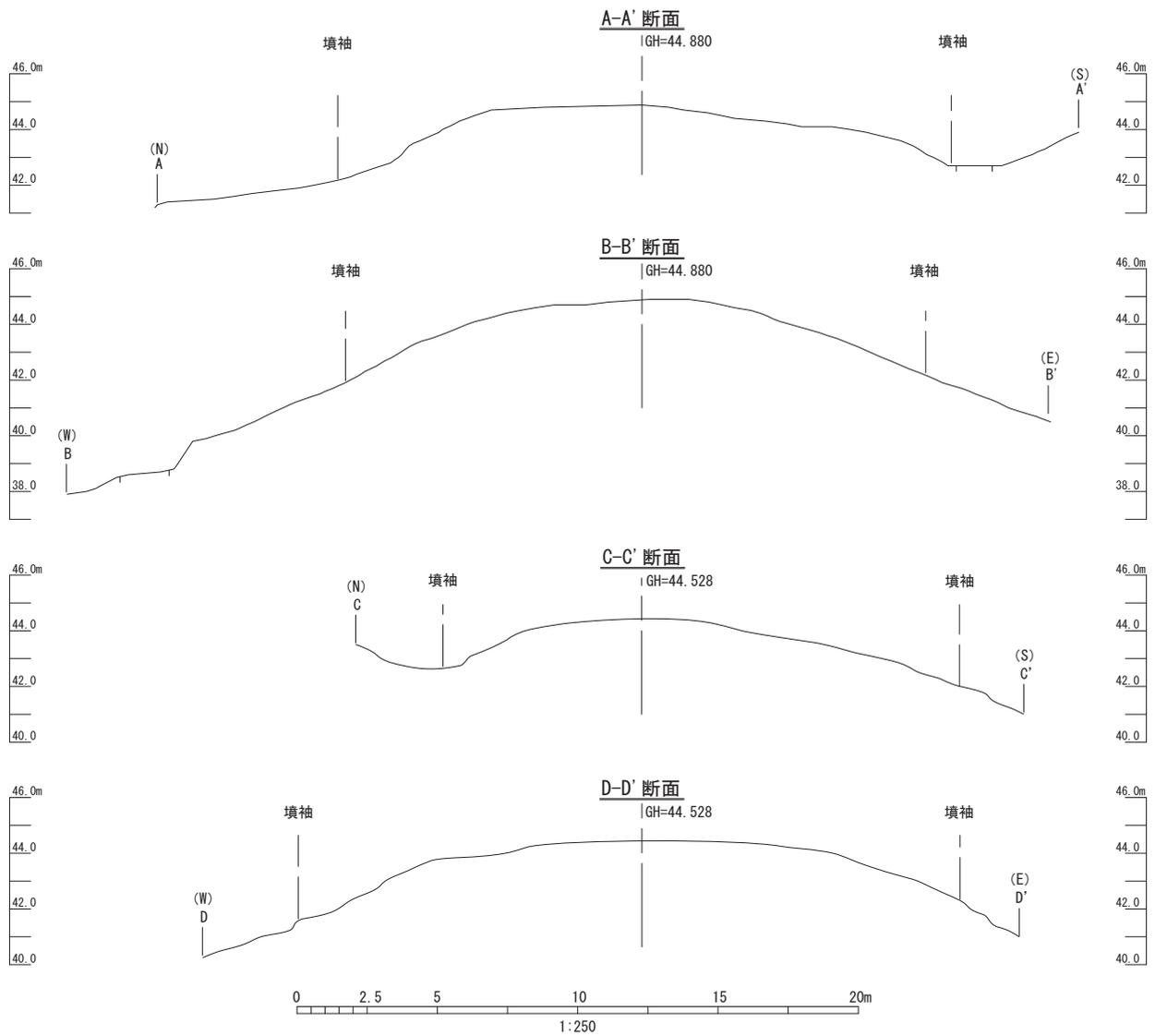


この地図は、能美市長の承認を得て同市発行の能美市都市計画基本図 縮尺 2,500分の1を使用して作成したものである (承認番号収能美ま整第646号)。

第2図 河田向山古墳群分布図 (S = 1 / 1,250)



第3図 河田向山1・2号墳平面図 (S = 1 / 250) [製図: 編著者一同]



第4図 河田向山1・2号墳断面図 (S = 1 / 250)

<主要参考文献>

- 石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』
- 石川考古学研究会 1951 『石川県加賀能登石器時代古墳時代遺跡地名表』
- 石川考古学研究会 1957 『県下の貝塚と古墳』
- 石川考古学研究会 1963 『石川県遺跡地名表』
- 石川考古学研究会 1968 『能美古墳群調査概要』
- 小松市教育委員会 2020 『河田山古墳群』
- 能美市教育委員会 2011 『西山古墳群範囲内容確認調査報告書』



1. 河田向山古墳群遠景（南側上空より）



2. 河田向山古墳群（北側上空より）



3. 河田向山1号墳（2号墳墳頂より）



4. 河田向山1号墳（南東より）



5. 河田向山2号墳（1号墳墳頂より）



6. 河田向山2号墳（南東より）



7. 清掃作業の様子〔撮影：今井〕



8. 測量作業の様子〔撮影：絹川〕



9. 測量作業の様子〔撮影：半間〕



10. 参加者集合写真（2号墳墳頂）

報告書抄録

ふりがな	こうだむかいやまこふんぐん そくりょうちょうさほうこくしょ 1							
書名	河田向山古墳群測量調査報告書 1							
シリーズ名	金沢学院大学考古学調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	戸根比呂子、知田真幸、小谷友也、石原梢、今井咲良、大森公太、絹川史香、小堀真依、坂下愛加梨、得田航生、半間結、松島亮太、向井新、輪湖幸太							
編集機関	金沢学院大学文学部							
所在地	〒920-1392 石川県金沢市末町10番地 TEL 076-229-8835							
発行年月日	2023年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
河田向山古墳群	石川県			36°	136°	20221023～ 20221106	0	活用目的調査 (測量調査)
	能美市泉台町	17211	10032	25′	30′			
	小松市下八里町 同 河田町	17203	3038	36″	59″			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
河田向山古墳群	古墳	古墳時代		古墳		—	特になし	
要約	河田向山古墳群において、周知の埋蔵文化財として知られていた7基の古墳に加え、さらに2基の古墳が存在することを確認した。また、測量調査により、1号墳は直径22mの円墳、2号墳は長辺24mの方墳であることを確認した。							

河田向山古墳群測量調査報告書（1）

発行日 2023年2月28日
 編集 金沢学院大学文学部文学科 歴史学専攻考古学ゼミ
 石川県金沢市末町10番地
 印刷 山代印刷株式会社